

No. 963

水郷旅情

かつて松尾芭蕉が訪れ、野口雨情が詩った名勝の地、水郷。利根川の支流が大地を網の目のようにぬう。そこに漁師がエビを追いタナゴを漁う。その姿も年々うめたてられる小川と共に姿を消しつつある。

船はこの水郷にあって生活にかかせなかつた。

春に早苗をつみ、秋に稲穂を積んで行きかつた船も、今はうちすてられた。その姿も旅情をそそる。

行きかう旅人の心をなぐさめた、あやめ。それも今は公園の中にわずかに残されているばかりだ。梅雨の頃、恒例のあやめ祭がやってくる。佐原囃子が鳴り響けば、きれいどころのねえさん達があやめの園を踊り歩く。短い花の命を惜しむかのように踊りは夜までつきない。あやめ祭が終ると、もう夏の訪れも近い。

密室の総裁選

三・角・大・福・次の総裁をめざして多数派工作にしのぎを削る四人のサムライ。……我日本の柱たらん……細い体で日本を支えると大張りきりの福田さん。俺の後継者はお前だと佐藤さんに応援され総裁 ダービー の本命に！ しかし、そこは奇奇怪怪の政治舞台裏、五人目の立候補者と思われていた中曽根さんが対抗馬の田中さんへ肩入れ。あわてた福田さん緊張したムードで連日作戦会議。

ミス・シンガポールで少々疲れの見える福田さんを励まそうとスタッフも細い気の使いようだ。若さを売りものに精力的に動き回る田中さん。あちこちに顔を出し、三木・大平さんとも厚い連帯の握手。だが油断は禁物。一本釣り、忍者部隊と隠語が花ざかりの自民党内、情報屋が暗躍し、すべてが秘密のベールにおおわれる。多数派工作激化を配慮して招集された党内の長老会議。

保利幹事長は四人の候補者をまねいて公正な選挙を要請した。

次期総理に直結する自民党総裁がわずか 500 人足らずの選挙権者で選ばれる密室の選挙。このままでは国民の政治不信は増々つのるだろう。